

52 済生学舎出身の医師三木保長の生涯 と東大整形外科教授三木威勇治につ いて

唐 沢 信 安

(一) はじめに

筆者は長年に亘って、済生学舎出身の医師達の足跡を調査してきた。

今回は、高野山の僧侶として修業し、親王院の住職から、一念発起して、医学の道を求めて済生学舎に学び、苦節三十六年の年月を要して医師免許を取得した三木保長^{なが}について述べたい。その間息子一衛^{かずえ}を愛知県立医学学校に学ばせ、更に縁戚関係にある三木威勇治^{いさはる}青年に学資援助をして、東大整形外科教授への道を開いた特異な医師三木保長について報告する。

(二) 三木保長の経歴

保長は元治元年(一八六四)に尾張藩士の子として現

在の名古屋市中区南鍛冶屋町で生をうけた。明治維新後、思う所ありて高野山に登り、僧籍に身を置き、修業に専念した結果、高野山親王院の住職に昇進した。然し、保長は医学の道で人々を救済せんとして明治十九年(二十三歳)の時、福岡県遠賀郡岡垣村波津の三木梅仙^{ばいせん}医師の弟子となった。(梅仙は保長を養子とし、都筑姓から三木保長と改めさせている)その後明治二十七年五月、保長三十一歳で上京し、本郷の済生学舎に入學し、五年間在學し、明治三十年に医術開業前期試験に合格している。然し後期試験に及第せず苦難な過程を辿る。明治十三年には、神田小川町の東京顕微鏡院に学び、細菌学・伝染病等を修得している。当時保長は明治二十一年には、妻栄^{さかえ}との間に長男一衛^{かずえ}を儲け、順調に成育し、一衛は愛知県立医学専門学校を明治四十四年に卒業し、父の保長より六年も早く医師の免許を得て、更に東大の青山内科・九大の小児科で実地に臨床を学んだ。一方、保長も漸く大正五年六月の東京での医術開業後期試験に合格し、五十七歳で医師の資格を得た。親子二人は力を合せて、名古屋市中区千早町に「昭和病院」を設立し活

躍した。一衛は福岡県遠賀郡岡垣村手野の医師三木瀧治の養女サトと結婚し、幸せな家庭を築いた。筆者の手元に、サトと義弟の三木威勇治の東大生姿と、三木保長・一衛一家の家族写真がある。

(三) 三木威勇治の生いたち

威勇治の生家三木家は、小倉地方では名家で、九代も続いた医家であった。祖先の三木清閑は、家系図では、播州三木城主別所長治の異母弟で、黒田如水の妹を妻として九州地方に住み、三木清澤の時代に町医者となり、威勇治の父・三木瀧治迄で九代目を迎えていた。瀧治は万延元年に生まれ、長じて東京医学校の別課生として医学を学び、父道徹の死後、郷里の遠賀郡岡垣村手野に帰りて開業している。その後、町立芦屋病院に奉職して、人生の大半の二十一年間務め、十年間は院長であった。長男威勇治が誕生したのは、父の晩年で、瀧治はこの実子の誕生を喜んだ。然し瀧治は病弱で、自分の余命いくばくも無いことを感じていた。威勇治の行末を案じて次の様に手記を残している。

「爾後発育佳良、今日迄(明治四十年二月)著明の病氣

なく成長せり。されど余が生存中独立し得る事難し。養子等が後來は保育をなし呉れ、人となるべきものと考う。」

瀧治は予測通り、大正三年十一月、五十四歳で生涯を閉じた。威勇治九歳の時であった。後は養子三木虎吉夫妻の手で養育され、長じて、小倉中学に威勇治は進学した。一里余の山越道を毎日歩いて通学し、真面目で成績も良く、第一高等学校理科乙類に、大正十一年に入學した。それ以後は、名古屋の三木保長と一衛の父子が、威勇治の学資援助を申し出た。威勇治は東大時代ポルト部に属し、卒業後は整形外科の助手となり、自立する迄、保長の世話になりながら研究を続けた。昭和十年に岩手医学専門学校の教授となり、更に東北帝国大学教授となり、昭和二十四年に東大整形外科主任教授となった時は既に保長は世を去っていた。

(日本医科大学)